

子どもたちは、不作為をいつ頃から認識できるか？

林 創（京都大学大学院教育学研究科）

問題と目的

他者のある行為が良くないかどうかを判断する上で、その人がある事実を知っていたかどうかといった心的状態を理解することは、その人が「結果の予見が可能だったかどうか」の判断につながり、重要な役割を果たす。たとえば、女の子が机の上にケーキを置いて出かけている間に男の子がケーキを食べてしまった場合、男の子が「ケーキは女の子のものである」ことを知っている場合は、男の子は女の子が悲しむことを予測できる。一方、それを知らない場合は、女の子が悲しむことは予測するのが難しい。一般に、前者の男の子の方が、後者よりも良くないと判断されるはずであるが、この判断には、男の子の心的状態の理解による結果の予見可能性の有無が重要となると考えられる。

ここで、一般的な悪事には、ある言動が伴っており、それが原因で責任があると判断される。たとえば、ナイフで人を刺して殺してしまった場合、「ナイフで刺す」という動きが原因で、その行為者に責任性が帰属される。しかし、言動が伴ってなくても責任がある場合がある。たとえば、溺れている人を助けずに立ち去って水死した場合、「溺れているのに何もしない」という動きのない行為に対して責任が問われるはずである。刑法では、上記のいずれの場合も犯罪とされており、「ナイフで人を刺す」というような身体の積極的な動作がある犯罪を「作為」，「溺れているのに何もしない」というような積極的な動作がない犯罪を「不作為」とされている。

一般に大人では、意図や生じた結果が同等の場合、作為の方が不作為よりも悪いと判断する傾向がある（e.g., Haidt & Baron, 1996; Spranca, Minsk, & Baron, 1991）。しかし、こうした研究は、調査対象者が作為と不作為の両方を既に認識しているという前提のもとに行われている。そこで、子どもたちは不作為も作為と同じ時期に認識できるのかどうか、作為と不作為を認識する能力に差があるのかどうかを検討する必要があると思われる。

本研究では、この問題について、単に「…を知っている」という一次の心的状態の理解に加え

て、「『…を知っている』と思っている」という二次の心的状態の理解（e.g., 林, 2002）にも注目して検討する。

方 法

調査対象者 大阪府内の公立小学校の 1 年生，3 年生，5 年生の 142 人を対象とした。

課題 B4 判中綴じの絵本形式で調査用紙を作成した。Yuill and Perner (1987) を参考に、男の子の心的状態のレベル 2（一次・二次）×言動 2（あり・なし）の組み合わせによる 4 つの課題を用意した。各課題はすべて、お話①とお話②で構成され、どちらのお話も「男の子が何かをする（言動あり：作為）」，または「何もしない（言動なし：不作為）」ことで、女の子にとって良くない事が生じるお話であった。しかし、男の子の心的状態を理解できたときのみ、どちらの男の子が結果の予見が可能であったかを区別でき、より良くない方を判断できるという構造を持っていた。

各課題で 3 つの質問を用意した。第 1 は「確認質問」で、2 つのお話を理解した上で区別できているかを、心的状態の理解を必要とせずに問うものだった。第 2 は「心的状態の理解質問」で、「…であるのを知っている（知らない）男の子はどちらか？」（一次），または「『…であるのを女の子が知っている（知らない）』と思っている男の子はどちらか？」（二次）だった。選択肢は「お話①の男の子，お話②の男の子，どちらかわからない」の 3 つだった。第 3 は「判断質問」で、「どちらの男の子がより良くないことをしたか？」だった。選択肢は「お話①の男の子，お話②の男の子，どちらも同じくらい良くない」の 3 つだった。

手続き 各学年で 2 クラスずつ調査対象としたため、カウンターバランスを考慮した 2 種類の調査用紙を用意し、それぞれを各クラスに割り当てた。すべての学年で、各課題の文章と質問を一度だけ読み上げながら、クラスごとに集団で実施した。

結 果

確認質問：各学年の各課題で、正答率はチャンスレベル以上だった。課題で学年間の正答率に差があるかどうかを調べるために、 χ^2 検定を行なった

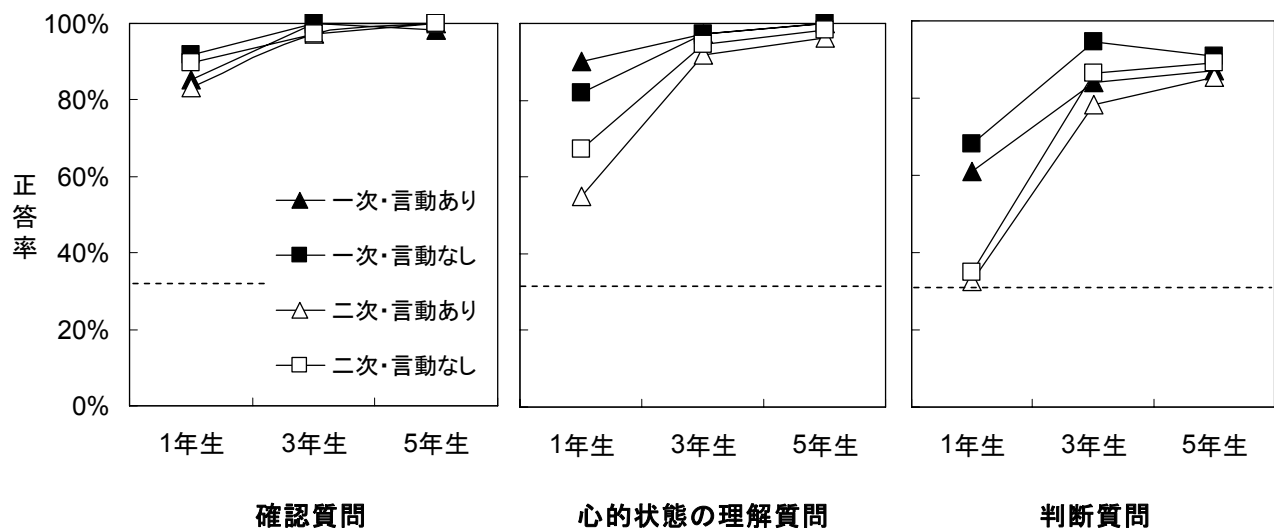


Figure 1 各質問の正答率

ところ、各課題で有意だった。学年ごとに4課題の正答率に差があるかを調べるために、Cochranの Q 検定を行ったところ、各学年で差がなかった。このことから、各課題は質的に同等と判断された。

心的状態の理解質問：各学年の各課題で、正答率はチャンスレベル以上だった。各課題で学年間の正答率に差があるかどうかを調べるために、 χ^2 検定を行なったところ、各課題で有意だった。学年ごとに4課題の正答率に差があるかを調べるために、Cochranの Q 検定と多重比較を行ったところ、1年生（「一次・言動あり」≧「一次・言動なし」>「二次・言動あり」）のみ有意だった。

判断質問：1年生の「二次・言動あり」と「二次・言動なし」を除いて正答率はチャンスレベル以上だった。各課題で学年間の正答率に差があるかどうかを調べるために、 χ^2 検定を行なったところ、すべての課題で有意だった。学年ごとに4課題の正答率に差があるかを調べるために、Cochranの Q 検定と多重比較を行ったところ、1年生（「一次・言動あり」≧「一次・言動なし」>「二次・言動あり」≧「二次言動なし」）のみ有意だった。

心的状態の理解質問と判断質問の関連：心的状態の理解質問と判断質問の関連を χ^2 検定で調べたところ、各課題で有意に正誤の関連があった。

考 察

以上より、他者の心的状態の理解ができると、その人の行為が良くないかどうかをより正確に判断できること、二次的な心的状態が関わると1年生ではこうした判断が難しいが、3年生までには安定してできるようになること、および1年生の

時点で不作為も作為と同等に認識できることが明確になった。

一般に、作為と不作為を比較させると、作為の方が不作為よりも悪いと判断する傾向がある(e.g., Haidt & Baron, 1996; Spranca et al., 1991)ことを考慮すると、作為と不作為の道徳的判断の程度には差があるが、作為と不作為を認識する能力には差がないことが示唆された。

しかしながら、本調査からは、1年生の時点で既に、作為と不作為の両方の正答率が高かった。したがって、次の問題として、一次の心的状態の理解のレベルに絞り、さらに年齢を下げたときに、作為と不作為の間で認識の違いが現れるかどうかを調べる必要がある。

引用文献

- Haidt, J., & Baron, J. (1996). Social roles and the moral judgement of acts and omissions. *European Journal of Social Psychology*, 26, 201-218.
- 林 創 (2002) 児童期における再帰的な心的状態の理解 教育心理学研究, 50, 43-53.
- Spranca, M., Minsk, E., & Baron, J. (1991). Omission and commission in judgment and choice. *Journal of Experimental Social Psychology*, 27, 76-105.
- Yuill, N., & Perner, J. (1987). Exceptions to mutual trust: Children's use of second-order beliefs in responsibility attribution. *International Journal of Behavioral Development*, 10, 207-223.

(Key words: 作為, 不作為, 二次の心的状態の理解)